

EurekaXIII

六年制通信 No.21 令和7年10月3日(金)号

サunkコストねえ

テレビでは相変わらずバラエティ番組かグルメ番組(大食い番組も)、あるいはクイズ番組が多いようですね。最近ではテレビなど既存の媒体を、皮肉を込めた感じでオールドメディアと呼ぶようですが、ニューでもオールドでもメディアの信用度は昔も今も、そしてこれからもしっかりと高くはならない気がします。嘘の情報、全体から一部を切り取る報道、そんなのは昔からあります。ですから、自分で勉強することが大切なのですね。確信を持てるようになるまで勉強すると、自分で出した結論は生涯ぶれることがないと私の私淑する先生が言ってみえました。その通りだと思います。

大食い番組だったか忘れましたが、食べ放題のお店がよく紹介されますよね。高校の相撲部の子たちが出ていて、あまりに予想通りの展開に笑ってしまいます。たまに細い若い女性で信じられないくらい食べる人を見ますが、普段の食生活はどうなっているのでしょうか。余計なお世話ですが食費が…。面白いのは芸人さんだと何とかして元を取ろうとしますよね。だいたい失敗しているようですけど。

食べ放題ではないけれど、私たちは支払った対価の分だけは元を取りたいという衝動があるようで、これを「サunkコスト効果」と言います。有名な例では映画を観に行き始めて開始早々つまらないとわかったときにどういう行動をとるか、仕方ないと諦めて早々に帰るかと思いきや、いやいや高いお金を出して観ているのだからつまなくても最後まで観るぞと、そう考える人が多いようです。それが元を取る行為だというわけですね。サunkコストはコスト cost にサunk thank するのかと思っていたのですが、違うのです。コストは費用ですがサunkは thank ではなく sunk、つまり「沈む」の sink の過去分詞です。それで日本語では「埋没費用 sunk cost」と言うようです。なるほど。これ、映画くらいならかわいいものですがギャンブルになると雪だるま式に膨らんでどうにもならなくなる可能性があります。危険な心理ですね。

「元を取る」という言葉を聞くと、正確にはちょっと違うと思うのですが、二つのことを考えます。一つは忘れもしない、コロナ禍において全国規模で行われた一斉休校です。もう五年も前のことなのですね。あれは確か二月でした。卒業式が迫る中、三月二日以降の休校を決めたという発表があったのは。三月一日に卒業式をして、翌日からという一応の配慮があったと思いますが、あの時三重県の感染者はゼロでしたから、違和感を覚えましたね。それに中学校の卒業式はもっと後に行われる予定でしたから実施できなくなりました。私は3月の末日に生徒だけをベルホールに集めて卒業式をしました。入学式も高校はできませんでした。いやいや、困った思い出ではなくて、

思い出すのは、休校が長引いて結局夏休みに授業をすることになったときのことです。休校中もリモートで少しは取り組んでいましたが、当然のことながら授業は大幅に遅れていたのです。感覚的には、いくら夏休みに授業をしても学年末には授業の積み残しが出るだろうと思われました。ところが、久しぶりに教室での授業が開始されると、先生も生徒諸君も遅れを取り戻すべく急がなければという気持ちで一致したのか、淡々と授業は進み、何ら遅れることなく学年末を迎えられたのです。遅れた分を取り返したのですね。みんなの力で。先生は雑談をしている暇もなくどんどん授業を進め、諸君は諸君で集中して勉強しました。ちょっと意味は違うかもしれませんが、「元を取る」と聞くと私はあの時のことがいつも思い出されるのです。

もう一つは、君たちの学習に対する姿勢です。これ、タダではないのですよね、学校に通って勉強するのは。授業料もあるし参考書やノート代、通学の定期代、制服代などなど。君たちはたくさんお金をかけて（本当は保護者ですけど）授業を受けているのです。だったら「元を取ってやろう」という発想が生まれるはずだと思うのですが諸君からそういう言葉を聞いたことがありません。この場合元を取るとは勉強するということですが、寝ている生徒さえいます。もし授業一コマを受けるのにかかるお金を自分の小遣いから出すとしたら、今以上に真剣に勉強するのでしょうか。そもそも学校にサンクコスト効果は関係ないのでしょうか。ないとするなら、私はそこに勉強というものの本質があるように思います。勉強は対価を考えて行うものではないということです。私の言いたいこと、君たちもよく考えてみて下さい。

今週のおすすめ

・中山七里 『能面検事』 （光文社文庫）

「君のような事務官は要らん。出ていきたまえ」、初対面でこれ言われたらどうしますか。大阪地検のエース検事不破俊太郎、全く感情が読めない顔、人呼んで「能面検事」。新米事務官の惣領美晴が挨拶に訪れた時の検事の第一声がこれです。その理由をいくつか挙げるのですが、要するに感情がすぐ顔に出る、即ち何を考えているのかが被疑者に気づかれてしまう、ということらしい。だから向いていないと。

ドラマにもなって、私も観ていましたが面白かったよ。配役はだいたい本のイメージ通りでしたし。主人公は合理的にしかものを考えず、自分の行動によって（それは正しいのだけれど）周りはほとんど迷惑をする、なんてことは全く意に介さない。検事はたった一人で独立を保障されている「権限」でもあるわけですから、それでいいのですが、感情を持ち義理人情で生きる一般人には、まあ部下はついていけませんわな。しかし惣領も不破に反発しながら検事としての力量に魅力を感じていきます。大阪府警の隠蔽体質を暴いたことにより上司から圧力をかけられますが、そんなことはお構いなし。警察を敵に回そうが関係なし。検察官の実際を私は知りませんがね。

ですから実際に不破に近い検事がいるのかどうか、私にはわかりませんが、私は友だちには決してなれませんが。数メートル離れて見ていたい気もしますが。

BGMは NIKI の *Autumn* でした…。